

26	受験番号
中	

国
語

注意事項

- 一、この問題冊子は15ページまであります。
- 二、答えは全て解答用紙に書きなさい。
- 三、この問題冊子は回収しません。持ち帰りなさい。

小学五年生の「わたし（高梨美桜）」の母「深雪」は、脳出血によって植物状態となり、現在入院している。「わたし」は母の病室に毎日通い、親しくなった看護師の吉田さんとともにそこで時間を過ごしながら、母にいつも語りかけていた。なお、植物状態とは、意識がなく自分の意志で身体を動かせない状態をいう。いわゆる脳死のことではない。

病室を訪れると、母のベッドにはすでにカーテンが引かれていた。中から話し声が聞こえ、カーテンの下から何人も足だけが見えている。

わたしは屈みこんで、カーテンをくぐった。五人の医学生と思われる若い人たちと吉田さん、遠藤先生、そして、黒髪の脂ぎった男性教授がベッドを囲んでいた。

学生の一人はカルテを持って、

「……瞳孔……意識レベルは……」

はきはきと読み上げていく。

「……意識レベルは何点かな」

教授が遮って質問すると、医学生は黙りこんで、助けを求めるようにちらつと遠藤先生を見やる。

「7点ですね」

先生がぼそりと一言呟くと、教授は頷いて、また医学生は読み上げをはじめた。そういったことを繰り返した後、今度は教授が一人で話しはじめた。

「うん。そうだね。この人は脳出血で脳全部ダメになっちゃったけど、脳幹はまったくの無傷。つまり、教授が母の右手の甲をつねった。すると母はさつと手を引いて逃れた。」

「だから、こういった生理的な*反射は起こる。他にも、例えば胸骨」

教授は母の胸の前面に拳をおろし、服の上から強く擦った。ゴリゴリと拳の骨と胸骨の骨がぶつかり擦れる音がした。すると、母は顔をしかめて手を胸元に近づけ、教授の拳を振り払おうとする。

「痛みに対してこういった反応が返ってくるわけだ」
学生らは一様に興味深げに頷く。

「あと、周りの患者の手を見てごらん。植物状態では手の筋肉は拘縮する。みんな強く閉じてるだろう。ところがこの患者は珍しいことに開いたままなんだ」

学生らは母の開かれたままの手を見つめる。

「そして、」

教授がもしやもしやの指毛の生えた人差し指を母の掌に置いた。すると、母の手は食虫植物が虫を捕まえるみたいにふわっと閉じて、教授の指を優しく包んだ。教授は指を握られ、とても嬉しそうな表情になる。

「把握反射ができてるんだ。新生児と同じだね。多分、大脳皮質のある部分だけが壊死してその種の抑制がとれたんだろう。それに関しては私が学会に報告した論文があるから、後で読んでおくように。さ、君から試して」

学生らは順々に母の掌に指を置いていく。すると、母は全員の指を優しく手で包んでいった。指を握られた学生はみんな幸せそうな顔になっていく。

母が誇らしかった。すぐに自分の手も包んでほしくなって、わたしは最後の学生の後ろに並んだ。そして、順番が来ると、母の掌に拳を置いた。ふわりと包んでくれた母の手は温かくて、思わずお腹がくすぐったくなる。

「みおちゃん」

*反射……意識や意志とは無関係に、一定の刺激に対して一定の反応を示すこと。

教授の横で介助かいじよについていた吉田よしださんが気づいて、

「あの、こちらの患者かんじやの娘むすめさんです」

うやうやしく教授に告げた。わたしは母の手をひっくり返して、手の甲こうを強くつねった。母はすばやく手を引いて、わたしは満足げな気持ちでみんなを見上げた。しかし、教授を含めた全員が顔を逸そらし、それから、彼らかれは会釈えしやくしてすみやかに向かいのベッドに移っていった。遠藤えんどう先生だけが目元を緩ゆるめて小さく手を振ふってでていった。

一人ぼつんと残されて、わたしはふたたび母の手をつねった。母は手を捻ねじって、胸元むなもとまで引く。それをしつこく追いかけては強くつねっていった。

「みおちゃん」

吉田よしださんはカーテンから半身を出して、なんとも言えない表情をしている。

「みおちゃん、つねっちゃだめ」

わたしは悪びれもせず、

「なんでえ」

吉田よしださんを見ながら母の首をつねった。吉田よしださんはずっと入ってくると、わたしの手を優しくとった。

「お母さん、嫌いやがつてるから」

「ただの反射じゃないの？」

「それでもいじめんといてあげて。この前も青アザできたでしょ」

そう言うてから、吉田よしださんはカーテンから首をだして周りをうかがう。安心した顔で戻もどってくると声のボリュームを抑おさえて、

「どうしてもつねりたいときはここか、ここ」

内出血になりにくい場所を指で数か所ほど指し示す。わたしがその皮を強く捻じると、母はイヤイヤするように胴体をくねくねとよじる。

「吉田さんも時々、ここつねってるん？」

何気なく咳くと、吉田さんは目を大きく見開いてから、

「つねっていいのは、みおちゃんだけ」

と瞳を揺らして首を振った。

「つねっていいのに」

「嫌じゃないの？」

「わたし、お母さんとみんなが触れ合ってるん、好きやで」

「そうなん」

「でも、大きな声で話す人は嫌。*お母さんうるさい人苦手やから」

吉田さんは相槌を打ちながら母の手をアルコールで拭いていく。隣から教授と*みいさんの声が行きかうのが聞こえてくると、

「主任さん、ちょっとー」

向かいのカーテンから教授の声がする。

*お母さんうるさい人苦手やから……入院後、母は大きな声に拒絶反応を示したことがある。

*みいさん……後に出てくる「あつ君（あつひさ）」の母親。「あつ君」は、「わたし」の母と同じく植物状態で入院してきた少年。

「はい」

吉田さんは急いで向かいのカーテンの中に入って行く。それを追いかけて、わたしは向かいのカーテンをくぐった。ベッドの向かいには、みいさんが丸々とした胴体で猫脚の青いいすに座りこんだまま、あつ君の利き手である左手を揉み続けていた。

「回診だから廊下へ、って言ってるんだけど。ねえ、遠藤君」

遠藤先生は頷きはするものの、無表情ですぐにそっぽを向いた。教授が困り果てた顔を吉田さんに向け、「回診中ほどの家族にもでていってもらってるんだけどねえ」

とぼそりと漏らした。

「あの、もうしわけ、」

吉田さんが口を開くなり、

「あたし、付き添いますからっ」

丸い胴体から甲高い声がでる。すると、疲れ気味の教授や若い学生たちの背骨もカチツと上下に伸びる。

「うちのあつひさ、ときどき腕を大きく振り回すので」

回診の時、父や祖母が悲しそうな息を吐いて廊下へ退場していくのを見ていたわたしは、みいさんのヒステリックな声に一筋縄ではないかない人だと唾を飲んだ。教授も学生らも同じように喉仏を下げて、空気ごと唾を飲みこんだ。

そこから、みいさんは袖をめくって太ましい両腕をだし、あつ君の手を揉みながら、ぼそぼそとあつ君の状態を話す学生の話の聞いては時おり頷いたりした。そして、順番に触診する段になると、あつ君に触る人をにこやかに見つめていった。

その日の夜、食卓につくなり、わたしはみいさんが回診時に病室に居座った話をした。すると、父は嬉しそうに

ビールを呷り、祖母は満足げに頷いた。

「あとなあ、カルテ読んでた人がなあ」

「うん」

「ママの、入院日言ってるんだけど。わたしの誕生日と同じやったん」

母との結びつきを感じたわたしは嬉しくて、その偶然を語り続けた。

「西暦から日まで全部一緒やって、あれ？って。それって、わたしの誕生日と一緒やんっ！て、びっくりしてん」

父は途端に不機嫌になり、祖母は悲しそうな顔になる。

「美桜」

父の声色は明らかに怒っているものだった。まずいことを言ったと気がついたものの、何がまずかったかまったくわからない。頭に何も浮かんでなくて、わたしは母のようにただ呼吸を続けた。

しばらく食卓に沈黙が続いた後に、

「前にも言うたやろ。出産の時にあなったんや」

父がそれだけ言うと、ビールが入ったグラスをテーブルに置いて、のそのそと寝室に引っこんでいき、そこからでてこなくなった。

翌朝、起きるなり祖母はわたしをリビングの雑貨棚の前へと引っばった。二十二歳の時に職場で父に出会って、二十四歳で結婚し、その年に妊娠した。そして翌年、わたしを出産した時に脳出血を発症し、大脳のほとんどが壊死した。自分の全てを失い、生きるための機能だけが残り、そこから母は植物状態になった。

そう話し終わると、祖母は棚の引きだしの一つを開けた。そこには家族の昔の写真が溢れていた。

祖母が朝食のトーストの横に写真の束を置くと、わたしはいつも通り、焦げ目をすこしつけて焼いたトーストを齧

りながら、一枚一枚写真をめくっていった。

父と祖母と一緒に写っている女性は、どの写真でもばっちりと目を開けて立っていた。

座っている父を後ろから抱きしめたり、安産祈願のお守りを首からかけて、大きく膨らんだお腹を両手で抱えて穏やかな瞳でこちらを見つめていたり、あるいは、前の家のリビングで「美桜」という字を半紙に書いていたり。

それらの写真は今まで隠されてきたものではなかった。わたしは過去に何度も雑貨棚を開けて、その写真を見たことがあった。

しかし、そういった写真を見ても、わたしは父や祖母の若いころを楽しんでいただけで、一緒に写る女性を母として見たことがなかった。

他にもリビングには三人で写った結婚式での写真が一枚、祖母の部屋には女性が一人で大きく写った写真が一枚、後は父の寝室に小さなものが一枚、常に置かれていたが、その女性を母と思ったことがなかった。

ただ、リビングに飾られているものには少し*シンパシーがあった。それは引きで撮られたせいか全員が目を瞑ったように写っていて、なおかつ母は斜めに構えて顔を左に向けていたから、今の母が立っただけに見えたからかもしれない。

写真だけではなかった。動画も見たことがあった。動画の中で、女性はウェディングケーキを切っていたり、手紙を読んでいた。よく響く声で笑っていたり、体を震わせて泣いたりしていた。

また、父や祖母から何度も昔の母の話聞かされたはずだった。

母もわたしと同じ小学校に通っていて、今の教頭先生はかつて母の担任だったこと。

頭の良かった母は中学から県外の中高一貫の私立学校に通っていて、電車通学をしていたこと。

国道沿いでガソリンスタンドをやっているオーナーが当時大学生だった母に惚れこんでいたこと。

町役場の就職内定が転がりこんできたが、それを友達に譲ったこと。

蕎麦好きの母は父をよく誘って病院近くの「山橙香」で鴨南蛮を食べ、必ずその後隣に隣の駄菓子屋によったこと。ことあるごとに母のいろいろな話を聞かされたはずだった。思い起こせば、出産時に脳出血を起こして植物状態になったという話も前から何回も聞いていて、暗に諭されてきたはずだった。

しかし、*寡黙な母と過ごしているとそんな話は母のどこにも繋がらないまま流れていって、気がつけば母は生まれた時からこういった状態なんだと無意識に思ってしまうのだった。

ステーキを前にフォークとナイフを持って写る知らない女性。アップで撮られた写真の女性は瞳をこつちに向けていて、そこにはたしかかな意志と感情があった。写真の女性は普通に歩いて、普通に目を開けて話していた。首も捻じれてなくて、顔が正面を向いたり右を向いたり、自由自在だった。

わたしは朝食を食べ終わると、さっそく着替えて支度をした。玄関をでて自転車に跨ると、心臓の打ちかたがいつもと違っていた。初対面の人に会いに行く時の打ちかただった。脚に力が入らず、漕いでもいつものように進まない。

裏手の駐車場につく頃には息が切れて体が怠くなっていた。自転車を降りてから、家に帰ろうと何度か頭をよぎったが、それでも裏口から入って、階段をあがっていった。

ナーステーションの中では申し送りが行われていた。

「みおちゃん、おとお……。あら、裸足」

*シンパシー……共感。

*寡黙……おしゃべりでないさま。

吉田さんを会釈でかわして、病室へと駆けこんでいった。朝食の時間前で五つのベッドにはカーテンがかけられていた。母のカーテンをのぞくと、ベッドは起こされておらず、母は横向きに寝ていた。

窓の外では葉の隙間から白い朝陽が漏れて、生け垣全体が浮き上がったように光っていた。その重みのない白い光が、窓際の母と枕元の近くでパイプいすに座る父をほのかに包んでいた。わたしは隣からパイプいすを拝借して、父の隣に座った。

カーテンを閉じると、自分にも淡い光の粒が染みこんでいくように感じた。わたしも父も何も喋らず、眠る母を黙って見つめる。母の、すーすーという健やかな寝息だけが耳に聞こえてきた。

父は目を細めて、その寝息に耳を澄ますと、嬉しそうに鼻から息を漏らした。

「不思議やなあ」

父は腕組みをして微笑みながら首を捻った。

「美桜、今はお母さん寝てるよな？寝てる時の息やんな？」

わたしは母を見つめたまま、黙って頷いた。

「おれは美桜みたいに、お母さんのこと、なんでもわかるわけじゃないけどな。寝てるかどうかはわかる。寝息だけはかわってない」

父は母の頬を親指で撫でた。父が母を触るのをひさしぶりに見る。

「信じたくないかもしれないけど、昔はな、お母さん、普通に話しててん」

「うん……」

「あの写真のママは嫌いか」

「嫌いとかじゃないけど」

「そうか」

「今のママは嫌いなん？」

「嫌いとかじゃないけどな。ただなあ、どうしてもなあ」

父はふたたび腕を組んで、首を俯かせる。

「美桜がな、お母さんが生まれつき、こうなんや、って思ってしまうようにな、お父さんとか、おばあちゃんはどうしても、今のお母さんは深く寝てるだけやって思ってしまうんや。これが今のお母さんやって頭ではわかっているんだけどな。こうやって、寝てる時とかはやっぱり、目え覚ますんちゃうかってな。先生から、二度と元に戻ることはないって言われてもな、目え覚まして普通に話しはじめるんちゃうかって、初めの五年くらいは毎日思ってた。もう今ではそんなことあんまり思わなくなったけど。ただな、今でも、寝てる時に会ったらな、氣いついたら、昔の深雪が寝てるだけなように見えてくるんや」

たしかに白い朝陽を浴びる母は今にも目が覚めそうに見えた。

「だから」

強い鼻息と共に父は立ち上がる。

「朝と夜は会いに来たくないわ。会つてるときは嬉しいけどな」

父がカーテンからでていくと、後ろ髪引かれるような足音だけが遠ざかっていった。

その足音が聞こえなくなると、わたしは母に近づいて、脛をめぐり、唇をめぐり、髪をかきあげておでこをなぞる。

ポケットから写真を一枚出した。下脛の縁にある薄いほくろ、少し奥に引っこんだ前歯、生え際が斜めになった狭いおでこ。特徴の全てが写真の女性と一致する。

そんなことは、とうの昔に写真を片手に確認した（かくにん）ことだった。その時はそれでも、女性と母が重なることがなかった。同じ女性だと確認したにもかかわらず、同一人物だとなぜか感じなかった。その時も頭に浮かんだのは、大きく膨らんだお腹を両手で抱える、目を瞑（つむ）って首が捻（ね）じれた母だった。

しかし、今やうつすらと写真の女性と母が繋がりはじめていた。急に母がいろんなものを失った人間に思えた。胸がぎゅつと苦しくなると、助けを求めるように母の横によっていったが、もたれることができなかった。

今にも母が動画の女性として起きだして、

「はじめまして、美桜ちゃん。高梨深雪（たかなしみゆき）っていいです。今日からわたしが母親よ、ママって呼んでね」

目をはつきりと開けて、話（わ）しだしそうな気がした。少し気の強そうな、しっかりとした目つきで、胸（むね）に響（ひび）いてくるような声色（こゝろいろ）で。母とまったく同じ顔をした、まったく知らない女性が。

母の真横（まわら）に座（すわ）ったまま、わたしは胸（むね）を抱（かか）えてうづくまった。

わたしの母は動かないし、しゃべらない。目も開けないし、笑わない。それがよかった。

しかし、目の前にいるのは、やはり普通に生きていたあの女性が脳（のう）にダメージを負（お）って、何もできなくなつた人。それが今の母で間違（まちが）いなさそうだった。

そこからしばらくの間、母を訪（おしず）れると動画の声がどこからか聞こえてきた。朗（ほが）らかに笑い、時に父や祖母をたしなめるような強い声。

そんな声をだす女性が母に重（かさ）なると、

“もう、*甘（あま）えたな子”

と目（め）をはつと開けて、瞼（まぶた）が開いた勢（いき）いでわたしはどこかに吹き飛（と）んでしまいそうだった。

もたれることができなくなつてから、父や祖母のようにパイプ（パイプ）いすに座（すわ）って母の少し前（まへ）か後ろ（うしろ）を眺（なが）めるようになつ

た。

永遠に目が覚めないだけで体の奥にかつての母が眠っている、と思いこんでいる時の父や祖母のあの、母の少し奥を見つめるような焦点のずれた目つき。

そんな見つめ方を今、自分もしているのがわかった。

もし、元に戻ったら。という目つきで眺めていた。

そんな時は必ず、仲良くできるかな、怒ったら怖いかな。あとは、休日どこかに連れて行ってくれるだろうか。そんな考えが自ずと浮かび上がってくるのだった。

父と祖母と三人で遊園地に行った時もそうだった。疲れてベンチで休憩している父や祖母をおいて、アトラクションの列に一人で並んでいると、ふとあの女性が横に一緒に並んでくれたら、と妄想した。

しかし、数か月も経たないうちに、母はやはりいつもの母に戻った。

ブラックホールみたいな母の圧倒的な寡黙さに写真や動画の女性は吸いこまれて消えてしまった。写真や動画の母を見てから家をでて、自転車を漕いでいるうちに呼吸のなかにあの女性は消えていって、母に辿りついた時にはもうどこにもいなくなっていた。

そんな時、胸の中に淡い希望や期待の感触だけが残っていて、母に会うとなんだか物足りなく感じた。

それから、ふたたび母にもたれかかれるようになる、そんな期待も希望も、すぐに消え失せてしまった。

胸に湧きあがってきたものを話せるようになった。

“みお、産まんかったらよかった？ 昔みたいに歩いたり、話したり、働いたりしてみたい？”

* 甘えた……甘えん坊。

と訊ねてみても、母はただ呼吸を続けるだけだった。母の体のどこからも後悔の欠片を感じとれなくて、わたしは心の底から安心して、母に体重を押しつける。

そうすると、いつのまにか母と呼吸のリズムがまったく同期してしまっ、母がこうなってしまった経緯さえもどうでもよくなって、ただ黙って一緒に呼吸するだけになる。

ぼんやりとどこでもない一点を見つめて、

“ママの娘やから”

心の奥で囁いた。

“わたしも植物なんかも”

その囁きは声帯を使わずに震えて響いた。

次の一呼吸でそんな騒めきも頭の中から消えていって、わたしは西日の残りを腕に受けながら、ただゆっくりと呼吸を続けるのだった。

(朝比奈秋の文章による)

【二月一日入学試験後追記】
出典 朝比奈秋『植物少女』(朝日新聞出版刊)

問一 「すぐに自分の手も包んでほしくなって、わたしは最後の学生の後ろに並んだ」とあるが、それはなぜですか。

問二 吉田さんは「みおちゃん、つねっちゃんだめ」と言い、その後では「つねっちゃんだめ」とも言うが、

(1) 吉田さんが「つねっちゃんだめ」と言うのはなぜですか。

(2) 「つねっちゃんだめ」と言う吉田さんが「つねっちゃんだめ」とも言うのはなぜですか。

問三 「父は嬉しそうにビールを啜り、祖母は満足げに頷いた」とあるが、なぜですか。

問四 「父と祖母と一緒に写っている女性は、どの写真でもぼつちりと目を開けて立っていた」とあるが、「わたし」がこの「女性」を「母」と呼ばないのはなぜですか。

問五 「朝と夜は会いに来たくないわ」とあるが、父がこのように言ったのはなぜですか。

問六 「もたれることができなくなってから、父や祖母のようにパイプいすに座って母の少し前か後ろを眺めるようになった」とあるが、この時の「わたし」の気持ちの説明として最も**適当でない**ものを一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 自分を出産したことであるんなものを母は失ったのではないかと心苦しう思う気持ち。

(イ) 動かず喋らない母こそよかったのに、元に戻ればどうなるだろうかという気持ち。

(ウ) 父や祖母と同じ思いを共有できるようになって嬉しい気持ち。

(エ) 母が目覚めたら、一緒に何かしてくれるかと期待する気持ち。

(オ) 今まで知っていた母と写真の女性とが繋がり、どのように母を見ていいのかわからない気持ち。

問七 「母に体重を押しつける」とあるが、ここでの母は「わたし」にとってどのような存在ですか。

二

次の各文のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① バイリンで知られる観光地。
- ② このアタリに熊くまがいる。
- ③ 議案についてサンピさんぴが分かれる。
- ④ 夢をハグクはぐくむ。

-
- ⑤ 方針に異議をトナとえる。
 - ⑥ トロウとに終わる。
 - ⑦ ツトめ先へ向かう。
 - ⑧ 大コウドウたは昭和三年に建てられた。

以下余白

26	受験番号
中	

国語 解答用紙その一（二枚のうち）

一

問一 「すぐに自分の手も包んでほしくなって、わたしは最後の学生の後ろに並んだ」とあるが、それはなぜですか。

問二 吉田さんは「みおちゃん、つねっちゃんだめ」と言い、その後では「つねっちゃんだけは、みおちゃんだけ」とも言うが、
(1) 吉田さんが「つねっちゃんだめ」と言うのはなぜですか。

(2) 「つねっちゃんだめ」と言う吉田さんが「つねっちゃんだけは、みおちゃんだけ」とも言うのはなぜですか。

問三 「父は嬉しそうにビールを啣り、祖母は満足げに頷いた」とあるが、なぜですか。

問四 「父と祖母と一緒に写っている女性は、どの写真でもぼつちりと目を開けて立っていた」とあるが、「わたし」がこの「女性」を「母」と呼ばないのはなぜですか。

26	受験番号
中	

国語 解答用紙その二（二枚のうち）

問五 「朝と夜は会いに来たくないわ」とあるが、父がこのように言ったのはなぜですか。

問六 「もたれることができなくなってから、父や祖母のようにパイプいすに座^{すわ}って母の少し前か後ろを眺^{なが}めるようになった」とあるが、この時の「わたし」の気持ちの説明として最も**適当でない**ものを一つ選び、記号で答えなさい。

- (ア) 自分を出産したことであるんなものを母は失ったのではないかと心苦しく思う気持ち。
- (イ) 動かず喋^{しゃべ}らない母こそよかったのに、元^{もと}に戻^{もど}ればどうなるだろうかという気持ち。
- (ウ) 父や祖母と同じ思いを共有できるようになって嬉しい気持ち。
- (エ) 母が目覚めたら、一緒に何かしてくれるかと期待する気持ち。
- (オ) 今まで知っていた母と写真の女性とが繋^{つな}がり、どのように母を見ていいのかわからない気持ち。

解答欄

問七 「母に体重を押しつける」とあるが、ここでの母は「わたし」にとってどのような存在ですか。

二

次の各文の**カタカナ**を漢字に直しなさい。

- ① **バイリン**で知られる観光地。
- ② この**アタリ**に熊^{くま}がいる。
- ③ 議案について**サンピ**が分かれる。
- ④ 夢を**ハゲク**む。

- ⑤ 方針に異議を**トナ**える。
- ⑥ **トロウ**に終わる。
- ⑦ **ツト**め先へ向かう。
- ⑧ **大コウドウ**は昭和三年に建てられた。

⑤	①
える	
⑥	②
	り
⑦	③
め	
⑧	④
	む